

聞き手の反応行動が話し手の情意面にどのような影響を与えるか？

川田 幸寛 (札幌市立菊水小学校)
萬谷 隆一 (北海道教育大学札幌校)

Abstract

This study investigated whether the listener's reactions to the speaker can reduce the speaker's anxiety. Ninety university students were interviewed in English for 5 to 10 minutes. They were divided into two groups beforehand. In the first group, the interviewer reacted to them many times, but in the second group, he tried not to react to them. After the interviews, they answered a questionnaire that consisted of 19 items regarding their anxiety levels during the interviews. Based on the answers, a two-way ANOVA was conducted with reaction or no reaction and the subject's English ability as between-subject factors. The results found that there was a significant difference in the level of Avoidance anxiety in the second factor and Miscommunication anxiety in the both factors. The results suggest that the listener's reactions can reduce the speaker's anxiety by conveying the listener's comprehension of the speaker's intention.

1. はじめに

近年、日本の英語教育ではコミュニケーション能力の育成が求められ、とりわけスピーキング活動が重視されてきている (文部科学省, 2017)。しかしながら、スピーキングは英語学習者にとって、最も不安を感じる活動である (Horwitz et al., 1986)。また、その不安を減らす方法として、発話者が事前に話したい内容をノートに書くなど、スピーキング活動に対する事前準備を行うことが効果的であることも明らかにされている (小林, 2021; 飯村, 2016)。このように発話をする際の不安軽減方法に関する研究は多くなされているが、聞き手側の行動が発話者の不安を低減できるのか、さらには、どのような行動が発話者の不安を軽減できるかという研究はなされていない。そこで、本研究

では聞き手が行う反応行動，具体的にはあいづち・うなずき，笑顔などの反応が発話者の不安を軽減することができるかどうか，また，それらの反応と話し手の不安感の関係について調べる。

2. 先行研究

2. 1 不安の種類について

外国語学習における不安について，MacIntyre and Gardner (1991) は習性不安 (trait anxiety)，状態不安 (state anxiety)，状況特定不安 (situation-specific anxiety) の 3 種類に分類し，不安という言葉に含まれる感情の質的な違いを説明した。西谷・松田 (2003) によれば，具体的には，習性不安とは状況にかかわらず不安になりやすいこと指し，状態不安とはある特定の状況と関連して経験されるもので，その不安を経験し続けると，状況特定不安と呼ばれるものになる。

この分類からすると，外国語学習における不安は教室での外国語学習に反応して生起し，その経験が長期間繰り返されることから，状況特定不安であるという捉えが一般的である (Horwitz, 2010)。

2. 2 外国語学習と不安

外国語学習に関連する不安の研究から，不安と外国語習得は負の関係にあることが明らかになっている (Horwitz et al., 1986; MacIntyre & Gardner, 1991; MacIntyre, 1999)。Horwitz らは，「不安」という心的概念が学習に対し妨害的に作用すること，特にスピーキングが最も学習者を不安にする技能であることを指摘している。Young (1990) は，とりわけ他の学習者を前にして話す活動が学習者の不安に深く関係すると指摘した。また Horwitz et al. (1986) は，外国語の授業の中でもコミュニカティブな授業に特有な即興的な場面において学習者の不安が高まるとしている。総じて，話す活動には不安が伴うことが指摘されている。

2. 3 不安を感じやすい活動について

松宮 (2006) は公立小学校 2 校の 3～6 年生 544 名を高不安群と低不安群に分け，高不安群の児童の多くが，人前で 1 人で英語を話す活動に嫌悪感を示したこと，特に 6 年生は「1 対 1 で対話する」活動を好まないことを報告して

いる。また物井・羽根井（2017）の研究は、児童が具体的にはどのような活動で不安を感じているかを明らかにしている。英語授業における12の活動ごとの参加者の不安感について、特に『英語で友達と会話する』、『英語で外国人/日本人の先生と会話する』が不安感が強いことを示していた。筆者らは、これらの活動は能動的に英語を使用する1対1の活動であるためであると推測している。また17場面の参加児童の不安感に関する記述統計の結果では、『日本人の先生が英語で言ったことがわからない』、『自分から英語で友達/先生に話しかけなくてはならない』、『英語の授業で、一人で英語を話すとき、不安になる』が不安感が強いことを示していた。これらの活動においても、各参加者の話す責任が大きくなるため、不安感が高まるものと考えられる。これらの研究は、児童に関する研究であるが、成人学習者に対しても、1対1の対話など、個人の役割・責任が多くなる活動において不安が助長される可能性を示唆していると思われる。

2. 4 不安を軽減する方法について

Matsuda and Goble（2004）は、学習者の実態に合わせて講師が学習者の不安を軽減することが可能であるとしている。学習者の不安を軽減するためには、学習者を活動に巻き込み、心地よい雰囲気を作ることが必要であると述べている。

Crookall and Oxford（1991）は、学習者がクラスメートの前で個人のパフォーマンスを行う必要のない、脅威のない環境であれば、学習者はリラックスし、不安が軽減されると述べている。Mejías（2014）の研究によると、学習者が心地よいと感じる環境は、学習者の不安を軽減し、授業の参加を高めることを発見した。

2. 5 聞き手の反応が話し手の不安感に及ぼす影響について

英語教育の分野の研究ではないが、中川・鈴木（2014）の研究では、実験的に操作された聞き手の態度が、スピーチ場面での話し手の情意面にどのような影響を及ぼすかについて検討している。

実験参加者は大学生65名に加え、スピーチ課題における聞き手役として大学生および大学院生9名が参加した。聞き手役は3つのグループに分かれた。話し手に対する反応を全て抑制する「無視群」、話し手に視線を向けてうなず

きのみを返す「うなずき群」、笑顔で話し手に視線を向け、うなずきや「なるほど」「あなたは〇〇と感じられたんですね」などといった相づちを行う「共感群」の3つのグループである。

スピーチ課題は、65名の大学生が聞き手役の実験協力者に向かってスピーチを3分間行うという形で実施された。その課題の前後で、実験参加者は一般感情尺度、課題の印象に関する評定用紙に回答した。

結果は、肯定的感情得点で、事後回答でのうなずき群と共感群の得点が無視群より有意に高く、無視群とうなずき群の得点は事後回答より事前回答の方が高かった。否定的感情得点では、事後回答の無視群とうなずき群の値が共感群よりも有意に高く、無視群およびうなずき群では事前回答より事後回答の方が有意に高かった。このことから、共感群における聞き手の態度が話し手にとっては好意的なものであるとフィードバックされ、スピーチ課題のストレスを軽減させている可能性を示唆している。

2. 6 先行研究のまとめ

先行研究で、英語を話す活動が学習者を不安にさせることが明らかになっている。特に、1対1で英語を話す活動や、大勢を前に1人で英語を話す活動は、より一層、不安を感じさせることが示されている。また、その不安を軽減する方法として、学習者同士でコミュニケーションをすることや、聞き手が話し手に対して共感的な反応をすることが効果的であることが提案されている。

とりわけ、英語教育研究においては、中川・鈴木（2014）の研究の聞き手の態度が話し手の不安を軽減する効果についての研究は、例が見当たらない。本研究では、スピーキングの場面において、聞き手が共感的な反応をすることで話し手の不安を軽減できないかどうかを研究課題として設定した。

3. 研究課題

1. 聞き手の反応行動（あいづち・うなずきなど）の有無は、発話者の情意面にどのような変化を与えるのか？(RQ1)
2. 聞き手の反応の有無による情意面の影響が英語力によってどう変わるか？(RQ2)

3. 面接者（聞き手）の反応の仕方によって、被面接者（話し手）の不安の感じ方に違いはあるか？(RQ3)
4. 聞き手の反応行動の有無で、話し手の発話量に違いがあるか？(RQ4)
5. 被面接者（話し手）が不安を感じる度合いは、被面接者（話し手）のどのような行動に現れるか？(RQ5)

4. 研究方法

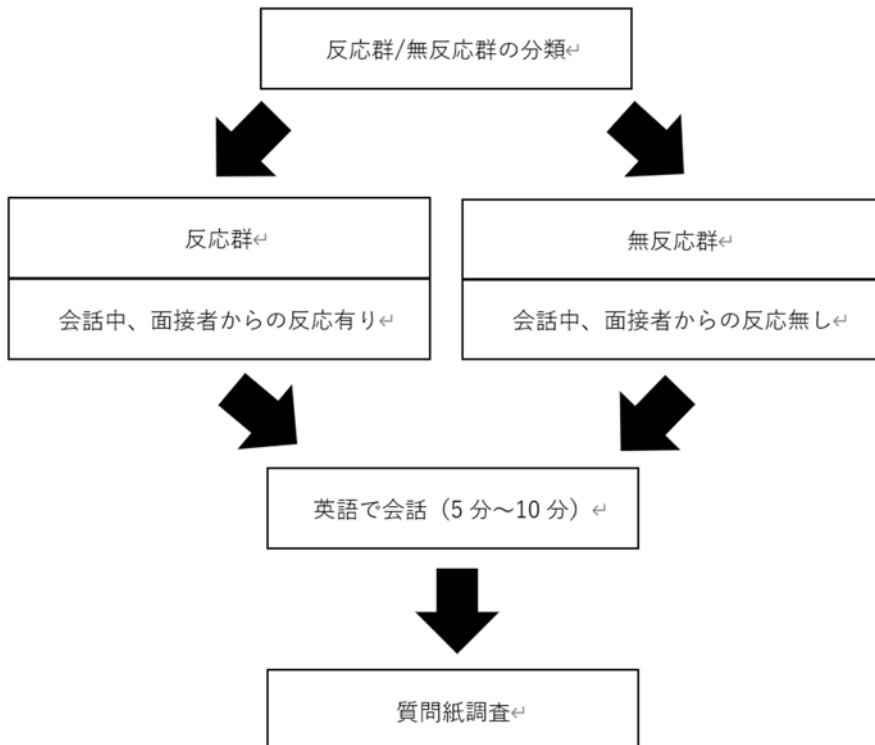
4. 1 参加者

参加者は北海道教育大学の外国語コミュニケーションを受講している一年生 90 名で、専攻は特別支援教育専攻、技術専攻、家庭科専攻、数学専攻、理科専攻、英語専攻、教育専攻、音楽専攻、心理専攻、体育専攻である。参加者は大学へ入学してから毎週、外国語コミュニケーションを受講しているため、英語を話す機会は継続的にあった。また、参加者の中には長期留学を検討しており、日頃から熱心に英語の勉強を行っている者も複数名いた。参加者の TOEIC の平均点は 572 点で、最高点 770 点で、最低点が 285 点であった。なお本研究では、話し手（大学生）にとって、面接者（聞き手）は留学経験があり上級の大学生ではあるが、成績評価する・されるという教師と学生の関係ではなかった。

4. 2 手順

研究の手順としては、大きく分けて 3 つの段階がある。第 1 段階では、参加者から最新の TOEIC の得点を聞き、その得点をもとに英語力に偏りが出ないように参加者を「反応群」と「無反応群」に分類を行った。第 2 段階では、面接者が参加者 1 名ずつと 5～10 分程度、英語で会話をした。この時、反応群に対して、面接者はうなずきやあいづちをするなど積極的に反応をした。一方で、無反応群に対して、面接者は質問をする、質問に答える以外、何も反応をしないようにした。その様子を 2 台のビデオカメラで正面と横から撮影した。第 3 段階では、英語による会話の後に、会話中の不安感を測るためにアンケートに回答してもらった。また、アンケートの自由記述にて、活動時のどんな場面で不安になったのかを答えてもらった。そして、これらの結果を基に分析を行った。

図1 研究デザインの概要



4. 3 研究材料

英語での会話で使用した質問項目については表1に、会話中の不安感を測るために使用したアンケート項目については表2にまとめた。

質問項目は、No.1 から 8 までの主たる質問と派生質問 (FQ: Follow-up Question) を示した。No.1 の挨拶から会話を開始した。No.2 を最初の話題として、好きなことや趣味を設定した。理由は、参加者にとって最も話しやすいだろうと考えたためである。No.3 は習慣を尋ねた。特に、起きる時間と寝る時間について尋ねた。No.4 では、アルバイトについて尋ねた。アルバイトをしていない参加者には、なぜそれをしていないのかを尋ねた。No.5 として高校生の頃の部活動について尋ねた。No.6 から 8 では、仮定法を用いた意外性のある質問を用意した。理由は、やや負荷を高め、即興的に話をさせるためである。質問6から8はそれぞれ、「日本以外の国で生まれるなら、どこの国が良かったか?」、「タイムトラベルができるなら、どこの時代へ行きたいか?」、「もしあなたが異性だとしたら、どのようなことをやりたいか?」の3つで

ある。質問文がやや長くなるため、理解を助けるため、質問内容を連想しやすいイラストを見せながら質問した（付録参照）。

続いて、英会話後の不安を測るためのアンケートは、2つのアンケート（磯田, 2008; 元田, 2000）を基にして作成した。磯田（2008）のアンケートは、No.1～9 までの質問項目で、英語を話す際に感じる一般的な不安の傾向について知るために使用した。例えば、「英語を話すときに緊張した」、「自分の英語は伝わらないと思う」などは、英語を話す上でどのような不安傾向があるのか、また、その不安はどのような考え方から来るものなのかを調べ、参加者の発話不安の傾向をおおよそ把握することができる。次に、元田（2000）のアンケートは、No.10～19 までの質問項目で、磯田（2008）よりも会話場面に焦点を置き、発話に対するより具体的な不安を測るため使用した。例えば、「相手の英語が分からなくて、どのように反応すればよいのか分からなくて不安になった。」は、典型的な会話の不安場面であり、磯田（2008）のアンケートは、このような場面における不安感を測ることはできない。この2つの方向から話し手の情緒面を調べることで、話し手の感じている不安をより正確に測ることができると考えた。回答は、1（全く当てはまらない）から5（非常に当てはまる）までの Likert scale を使用した。

表 1 会話中に使用された質問項目

| |
|--|
| 1. How are you? |
| 2. What is your hobby? FQ 例: When did you start to like it? Since childhood or being an adult? How often do you do that in a week? |
| 3. Tell me about your routine? FQ 例: What time do you get up/ go to bed? What do you do in the morning/night? How often do you work in a week? |
| 4. What is your job? FQ 例: How do you feel about it? Do you like it or dislike it? Why do you think so? |
| 5. What club did you join when you were a junior high/ a high school student? FQ 例: Why did you join that club? How was that club? Was it nice or bad? |
| 6. If you had been born in a foreign country, where would you have liked to have been born? For example, America, Germany, Australia, and Italy? FQ 例: Why would you have liked to have been born in that country? |
| 7. If you could time travel, which period would you like to go to? For example, Sengoku period? Yayoi period? Heian period? Mesozoic period? FQ 例: Why would you like to go to that period? |
| 8. If you were a man/ woman, what would you like to do? FQ 例: Why would you like to do that? |

表 2 被面接者の会話における不安について調査するために使用したアンケート

-
1. 私が話した英語は、相手に意味が伝わらなかったと思う。
 2. 私は、活動当時の英語力では英語で話すことができなかった。
 3. 私は、英語で話して、自分が考えていることを相手に伝えることができなかったと思う。
 4. 私は、相手と英語で話した時、緊張した。
 5. 私は、相手と英語で話した時、ドキドキした。
 6. 私は、相手と英語で話した時、リラックスしていた。
 7. 私は、できれば相手と英語で話したくなかった。
 8. 私は、相手と英語で話すことを避けたかった。
 9. 私は、英語で話さなければならない時は、できるだけしゃべらないようにしていたかった。
 10. 何回言っても、相手が私の英語を分からなかったとき、焦った。
 11. 相手との会話で、言いたいことが英語で上手く言えなかったとき、焦った。
 12. 相手が私の英語を聞いて、分からないという顔をしたとき、不安になった。
 13. 相手が私の知らない英語をたくさん話したとき、不安になった。
 14. 相手が私の英語を聞いて、「え?」と聞き返したとき、不安になった。
 15. 相手の英語が分からなくて、どう反応したらよいか分からないとき、不安になった。
 16. 相手との会話で、知っている英語が思い出せなかったとき、焦った。
 17. 初めて会った相手と話したとき、英語がうまく話せるかどうか心配だった。
 18. 相手が教室で勉強したものと違う英語を使ったとき、不安になった。
 19. 相手と話していたとき、英語を間違えないか心配だった。
-

5. 分析

5. 1 因子分析について

1人の参加者の英語力が他の参加者と比較して非常に高く、不安を全く感じていなかったため、外れ値として分析から除外し、合計89人の面接者のデータを分析した。19のアンケート項目から因子を抽出した。因子分析の結果、4つの因子が現れた。1つ目の因子(F1)は6項目(No.10, 12, 13, 14, 15, 18)が含まれ、これらは会話における具体的な場面での不安感を問うものであったため、「特定場面言語不安」と名付けた。2つ目の因子(F2)は6項目(No.4, 5, 6, 11, 17, 19)が含まれ、これらは一般的に英語を話す際に不安を感じるかどうかを問うものであったため、「発話不安」とした。3つ目の因子(F3)は3項目(No.7, 8, 9)が含まれ、これらは英語を話すことを避けようとしたかどうかを問うものであったため、「回避願望」と名付けた。4つ目の因子(F4)は4項目(No.1, 2, 3, 16)が含まれ、これらは自身の英語力不足のために相手との意思疎通に問題があったと思ったかどうかを問うものであったため、「意思疎通不安」と名付けた。

信頼度については、F1 が $\alpha=0.852$ 、F2 が $\alpha=0.848$ 、F3 が $\alpha=0.862$ 、F4 が $\alpha=0.721$ であった。全て 0.7 以上であるため、信頼度は十分であると言える。

表 3 因子分析の結果

| アンケート項目 | 因子 1 | 因子 2 | 因子 3 | 因子 4 |
|---------|--------------|--------------|-------------|-------------|
| Q14. | 1.005 | -.136 | -.010 | -.168 |
| Q13. | .735 | -.213 | -.019 | .052 |
| Q12. | .734 | .060 | -.121 | .170 |
| Q18. | .732 | .095 | .145 | -.248 |
| Q10. | .674 | -.148 | -.013 | .056 |
| Q15. | .542 | 0.74 | .092 | .015 |
| Q4. | -.110 | 1.059 | .038 | -.157 |
| Q5. | -.132 | 1.011 | -.016 | -.091 |
| Q6. | -.005 | .536 | .019 | .002 |
| Q19. | -.017 | .516 | -.028 | .241 |
| Q17. | .151 | .474 | .043 | -.125 |
| Q11. | .324 | .448 | -.139 | .159 |
| Q7. | -.106 | .090 | .973 | -.040 |
| Q8. | .108 | -.060 | .899 | .034 |
| Q9. | -.026 | -.043 | .598 | .082 |
| Q2. | -.095 | -.177 | -.065 | .971 |
| Q3. | -.122 | -.072 | .111 | .813 |
| Q1. | .127 | -.030 | .247 | .423 |
| Q16. | .067 | 0.322 | -.154 | .333 |

注. 太字はどのアンケート項目がどの因子に分類されているのかを示している。

5. 2 二元配置分散分析について

二元配置分散分析は、上記で説明したアンケート結果を使用して行われた。その際、参加者の 1 人を外れ値として分析から除外し、計 89 人のデータを分析に使用した。反応の有無と英語力の違いの 2 つを繰り返しなし参加者間の独立変数とし、それぞれの 4 因子の平均値を従属変数とした。

5. 3 発話分析

二つの方法を用いて発話分析を行った。一つは、反応群の参加者と無反応群の参加者の総発話語数を比較することである。筆者らは、反応があると不安が減少すると考えているため、参加者の総発話語数は反応群の方が無反応群よりも多いと予想している。この分析の方法については、最初に各参加者との会話を撮影したものを基に、文字起こしを行い、反応群の参加者の総発話語数と無反応群の参加者の総発話語数を、 t 検定を用いてその差を比較した。もう一つは、二つの群において、面接者の反応の種類と各因子の不安得点の関係を調べることである。分析方法は、上述のように文字起こしを行ったプロトコル

を参照して、反応種類ごとにコード入力を行い、面接者の反応の種類と参加者の不安の程度の相関係数を求めた。面接者の反応種類は、全 11 種類あり、極端にその回数が少ないものを分析から除外した。その結果、反応群では、面接者が相手の「発言を繰り返す反応」、「共感的反応」、「発話を促進する反応」、声を出して「笑う反応」の 4 種類の反応の視点から分析した。

それに加えて、参加者からの反応についても分析を行った。参加者が声を出して笑う反応、3 秒以上沈黙する反応、総発話語数の 3 種類の参加者からの反応について分析を行い、総計 7 種類の反応について発話分析をした。また、これらの分析も (2) と同様、参加者の 1 人を外れ値として分析から除外した。

6. 分析結果

(1) RQ1. 聞き手の反応行動（あいづち・うなずきなど）の有無で、発話者の情意面にどのような変化を与えるのか？

(2) RQ2. 聞き手の反応の有無による情意面の影響（不安の度合い）が学力によってどう変わるか？

反応の有無、英語力の差を参加者間要因とした計画の二元配置分散分析を実施した。因子 1「特定場面言語不安」は、反応の有無の主効果 $F(1,85)=1.156$, $MSE=.881$, $p=.285$; $\eta^2=.013$, 英語力の差の主効果 $F(1,85)=2.184$, $MSE=.881$, $p=.143$, $\eta^2=.025$, 交互作用 $F(1,85)=1.757$, $MSE=.881$, $p=.189$, $\eta^2=.020$ で、有意差はなかった。

表 4 「特定場面言語不安」の記述統計

| 反応の有無 | 英語力 | 人数 | 平均値 | 標準偏差 | 最小値 | 最大値 |
|-------|-----|----|-------|------|-----|-----|
| なし | 下位 | 22 | 2.652 | .959 | 1 | 5 |
| なし | 上位 | 22 | 2.621 | .958 | 1 | 5 |
| あり | 下位 | 24 | 2.701 | .954 | 1 | 5 |
| あり | 上位 | 21 | 2.143 | .876 | 1 | 5 |

表 5 「特定場面言語不安」の二元配置分散分析の結果

| Source | SS | df | MS | F | p | η^2 |
|--------|-------|----|-------|-------|------|----------|
| 反応の有無 | 1.019 | 1 | 1.019 | 1.156 | .285 | .013 |
| 英語力の差 | 1.925 | 1 | 1.925 | 2.184 | .143 | .025 |
| 交互作用 | 1.548 | 1 | 1.548 | 1.757 | .189 | .020 |
| Error | 74.90 | 85 | .881 | | | |

因子 2「発話不安」は、反応の有無の主効果 $F(1,85) = .782$, $MSE = .630$, $p = .379$; $\eta^2 = .009$, 英語力の差の主効果 $F(1,85) = .002$, $MSE = .806$, $p = .963$, $\eta^2 < .001$, 交互作用 $F(1,85) = .133$, $MSE = .806$, $p = .716$, $\eta^2 = .002$ で、有意差はなかった。

表 6 「発話不安」の記述統計

| 反応の有無 | 英語力 | 人数 | 平均値 | 標準偏差 | 最小値 | 最大値 |
|-------|-----|----|-------|------|-----|-----|
| なし | 下位 | 22 | 3.939 | .837 | 1 | 5 |
| なし | 上位 | 22 | 4.000 | .983 | 1 | 5 |
| あり | 下位 | 24 | 3.840 | .802 | 1 | 5 |
| あり | 上位 | 21 | 3.762 | .967 | 1 | 5 |

表 7 「発話不安」の二元配置分散分析の結果

| Source | SS | df | MS | F | p | η^2 |
|--------|-------|----|------|------|------|----------|
| 反応の有無 | .631 | 1 | .631 | .782 | .379 | .009 |
| 英語力の差 | .002 | 1 | .002 | .002 | .963 | .000 |
| 交互作用 | .107 | 1 | .107 | .133 | .716 | .002 |
| Error | 68.54 | 85 | .806 | | | |

因子 3「回避願望」の結果は、反応の有無の主効果 $F(1,85) = .007$, $MSE = 1.033$, $p = .932$; $\eta^2 < .001$, 英語力の差の主効果 $F(1,85) = 5.634$, $MSE = 5.820$, $p = .002$, $\eta^2 = .062$, 交互作用 $F(1,85) = .073$, $MSE = 1.033$, $p = .791$, $\eta^2 = .001$ で、反応の有無の主効果、交互作用は有意ではなく、英語力の差の主効果は有意であった。次に、英語力下位群と上位群の平均値を求めた。英語力下位群の平均値が $M = 2.884$, 英語力上位群の平均値が $M = 2.372$ であった。

表 8 「回避願望」の記述統計

| 反応の有無 | 英語力 | 人数 | 平均値 | 標準偏差 | 最小値 | 最大値 |
|-------|-----|----|-------|-------|-----|-----|
| なし | 下位 | 22 | 2.864 | .732 | 1 | 5 |
| なし | 上位 | 22 | 2.409 | 1.136 | 1 | 5 |
| あり | 下位 | 24 | 2.903 | 1.157 | 1 | 5 |
| あり | 上位 | 21 | 2.333 | .966 | 1 | 5 |

表 9 「回避願望」の二元配置分散分析の結果

| Source | SS | df | MS | F | p | η^2 |
|--------|-------|----|-------|-------|-------|----------|
| 反応の有無 | .007 | 1 | .007 | .007 | .933 | .000 |
| 英語力の差 | 5.820 | 1 | 5.820 | 5.634 | .020* | .062 |
| 交互作用 | .073 | 1 | .073 | .070 | .791 | .001 |
| Error | 87.81 | 85 | 1.033 | | | |

因子 4「意思疎通不安」は、交互作用 $F(1,85) = 6.149$, $MSE = .603$, $p = .015$, $\eta^2 = .068$ で、交互作用は有意であった。単純主効果の検定の結果、次の 2 点が明らかになった。(i) 上位群において反応群の得点が無反応群の得点と比べて有意に高い $F(1,85) = 12.07$, $MSE = .603$, $p < .001$; $\eta^2 = .124$ 。(ii) 反応群において上位群の得点が下位群の得点に比べて有意に高い $F(1,85) = 11.73$, $MSE = .603$, $p < .001$, $\eta^2 = .121$ 。

表 10 「意思疎通不安」の記述統計

| 反応の有無 | 英語力 | 人数 | 平均値 | 標準偏差 | 最小値 | 最大値 |
|-------|-----|----|-------|------|-----|-----|
| なし | 下位 | 22 | 3.693 | .707 | 1 | 5 |
| なし | 上位 | 22 | 3.716 | .757 | 1 | 5 |
| あり | 下位 | 24 | 3.688 | .677 | 1 | 5 |
| あり | 上位 | 21 | 2.893 | .954 | 1 | 5 |

表 11 「意思疎通不安」の二元配置分散分析の結果

| Source | SS | df | MS | F | p | η^2 |
|--------|-------|----|-------|-------|-------|----------|
| 反応の有無 | 3.811 | 1 | 3.811 | 6.321 | .014* | .069 |
| 英語力の差 | 3.307 | 1 | 3.307 | 5.484 | .022* | .061 |
| 交互作用 | 3.708 | 1 | 3.708 | 6.149 | .015* | .068 |
| Error | 51.26 | 85 | .603 | | | |

表 12 「意思疎通不安」の単純主効果の検定の結果

| Source | SS | df | MS | F | p | η^2 |
|-------------|-------|----|-------|-------|---------|----------|
| 下位群での反応の有無 | .000 | 1 | .000 | .001 | .980 | .000 |
| 上位群での反応の有無 | 7.278 | 1 | 7.278 | 12.07 | .001*** | .124 |
| 無反応群での英語力の差 | .006 | 1 | .006 | .009 | .923 | .000 |
| 反応群での英語力の差 | 7.072 | 1 | 7.072 | 11.73 | .001*** | .121 |
| Error | 51.26 | 85 | .603 | | | |

(3) RQ3. 面接者（聞き手）の反応の仕方によって、被面接者（話し手）の不安の感じ方に違いはあるのか？

まず、面接者が被面接者の発言を繰り返す反応と被面接者の各因子の不安得点の相関係数についてだが、因子 1（特定場面言語不安）、因子 2（発話不安）、因子 3（回避願望）、因子 4（意思疎通不安）の順に -0.013, 0.160, -0.113, 0.191 で、相関関係はほとんど見られなかった。共感的反応と被面接者の不安の度合いの相関係数は、-0.363, 0.227, -0.226, -0.242 と弱い相関関係が見られた。発話を促進する反応と被面接者の不安の度合いの相関係数に関して

は、-0.097, 0.038, -0.282, -0.204 で、発話促進反応と因子 3 と因子 4 の間に弱い相関関係が見られた。最後に、面接者が声を出して笑う反応と被面接者の不安の度合いの相関係数については-0.125, -0.156, -0.280, -0.396 であり、面接者が笑う反応と因子 3 と 4 の間に弱い相関があった。

表 13 面接者の反応と被面接者の各因子における不安得点の相関分析の結果

| 面接者の反応 | 因子 1 | 因子 2 | 因子 3 | 因子 4 |
|---------|--------|--------|--------|--------|
| 発言の繰り返し | -0.013 | 0.160 | -0.113 | 0.191 |
| 共感的反応 | -0.363 | 0.227 | -0.226 | -0.242 |
| 発話促進 | -0.097 | 0.038 | -0.282 | -0.204 |
| 笑う反応 | -0.125 | -0.156 | -0.280 | -0.396 |

(4) RQ4. 聞き手の反応行動の有無で話し手の発話量に違いがあるのか？

反応の有無，英語力の差を参加者間要因とした計画の二元配置分散分析を実施した。反応の有無の主効果 $F(1,85) = 1.803, MSE = 5632, p = .183, \eta^2 = .002$, 英語力の差の主効果 $F(1,85) = 13.52, MSE = 5632, p < .001, \eta^2 = .137$, 交互作用 $F(1,85) < .001, MSE = 5632, p = .994, \eta^2 < .001$ で，反応の有無の主効果，交互作用は有意ではなく，英語力の差の主効果は有意であった。

表 14 総発話語数の記述統計

| 反応の有無 | 英語力 | 人数 | 平均値 | 標準偏差 | 最小値 | 最大値 |
|-------|-----|----|-------|-------|-----|-----|
| なし | 下位 | 22 | 208.8 | 80.03 | 99 | 441 |
| なし | 上位 | 22 | 267.5 | 72.68 | 146 | 408 |
| あり | 下位 | 24 | 187.5 | 63.52 | 63 | 321 |
| あり | 上位 | 21 | 246.0 | 83.83 | 105 | 428 |

表 15 総発話語数の二元配置分散分析の結果

| Source | SS | df | MS | F | p | η^2 |
|--------|--------|----|-------|-------|---------|----------|
| 反応の有無 | 10155 | 1 | 10155 | 1.803 | .183 | .021 |
| 英語力の差 | 76150 | 1 | 76150 | 13.52 | .000*** | .137 |
| 交互作用 | .277 | 1 | .277 | .000 | .994 | .000 |
| Error | 478740 | 85 | 5632 | | | |

(5) RQ5. 被面接者（話し手）が不安を感じる度合いは，被面接者（話し手）のどのような行動に現れるのか？

無反応群の被面接者が声を出して笑う反応と不安の度合いの相関係数に関しては，因子 1（特定場面言語不安），因子 2（発話不安），因子 3（回避願望），

因子 4（意思疎通不安）の順に、-0.238, -0.03, 0.155, -0.04 であり、因子 1 との間に弱い相関関係が見られた。被面接者が 3 秒以上沈黙する反応と不安の度合いの相関係数については、0.079, 0.183, 0.316, 0.109 であり、因子 3 との間に弱い相関関係が見られた。最後に、被面接者の総発話語数と不安の度合いの相関係数は、-0.285, 0.229, -0.118, 0.083 であり、因子 1, 2 との間に弱い相関関係が見られた。反応群の被面接者が声を出して笑う反応と不安の相関係数に関しては因子 1 から 4 の順に、0.032, -0.112, -0.024, -0.161 であり、ほとんど相関関係はなかった。被面接者が 3 秒以上沈黙する反応と不安の度合いの相関係数については 0.275, 0.070, 0.493, 0.321 であり、因子 1, 4 との間に弱い相関関係が見られ、因子 3 との間に中程度の相関関係が見られた。最後に、被面接者の総発話語数と不安の度合いの相関係数は、-0.206, 0.012, -0.375, 0.433 であり、因子 1 と 3 との間に弱い相関関係、因子 4 との間に中程度の相関関係が見られた。

表 16 被面接者の反応と各因子における不安得点の相関分析の結果

| 被面接者の反応 | 反応の有無 | 因子 1 | 因子 2 | 因子 3 | 因子 4 |
|---------|-------|--------|--------|--------|--------|
| 笑う反応 | なし | -0.238 | -0.03 | 0.155 | -0.04 |
| | あり | 0.032 | -0.112 | -0.024 | -0.161 |
| 沈黙反応 | なし | 0.079 | 0.183 | 0.316 | 0.109 |
| | あり | 0.275 | 0.070 | 0.493 | 0.321 |
| 総発話語数 | なし | -0.285 | 0.229 | -0.118 | 0.083 |
| | あり | -0.206 | 0.012 | -0.375 | -0.433 |

7. 考察

7. 1 RQ1 に関する考察

(1) RQ1. 聞き手の反応行動（あいづち・うなずきなど）の有無で、発話者の情意面にどのような変化を与えるのか？

因子 1「特定場面言語不安」は、反応の有無によって参加者の不安の度合いに有意に差がなかった ($p=0.285$)。

因子 2「発話不安」は、反応の有無によって参加者の不安の度合いに有意差は見られなかった。 ($p=0.379$)。

因子3「回避願望」は、反応の有無で参加者の不安の度合いに有意な差はなかった ($p=0.933$)。

因子4「意思疎通不安」は、反応の有無で参加者の不安の度合いに有意な差が認められた ($p=.014$)。ここから、聞き手が反応をすると意思疎通に対する不安を有意に下げられることが分かった。これは、面接者からの反応がないと、被面接者は言ったことを理解してもらえたのかどうか判断できないためだと推測される。自由記述を見ていくと、Aさん(4.5点/5点)「自分が英語で伝えた時に無反応だった時にすごい不安を感じた。」や、Bさん(4.25点/5点)「答えた後もあまり反応がなくさらに不安になった。」などの意見があった。この因子を測る質問項目は、「話した内容が伝わっていないと思う」という趣旨のものが多い。そして、その判断をする時には、大多数の人は聞き手(面接者)からの反応を見るだろう。その肝心な反応がなかったために、無反応群における不安感が高まったものと考えられる。

7. 2 RQ2に関する考察

(2) RQ2. 聞き手の反応の有無による情意面の影響(不安の度合い)が学力によってどう変わるか?

因子1「特定場面言語不安」は、英語力の差による参加者の不安の度合いに有意差は見られなかった ($p=0.143$)。

因子2「発話不安」は、英語力の差による不安の度合いに有意な差は見られなかった ($p=0.963$)。

因子3「回避願望」は、交互作用に有意な差は認められなかった ($p=.791$) が、英語力の差で不安の度合いに有意差が認められた ($p=0.02$)。各群の回避願望の平均値を見てみると、無反応下位群 ($M=2.864$)、無反応上位群 ($M=2.409$)、反応下位群 ($M=2.903$)、反応上位群 ($M=2.333$)であった。これは、下位群は、英語力に対する自信のなさから、上位群よりも、英語を話したくないと感じる傾向が強いためであると推測される。自由記述を見ると、無反応下位群のCさん(3.667点/5点)は「もし男性になったら何をしたいか、それはなぜかという質問に答える時に、比較を使った表現をしようとしたが自信がなくてやめた。」と回答しており、自身の英語力のなさから、言いたい

ことを避けたことが分かる。このように、反応がある場合でも、英語力という要因によって、不安の度合いが高まることもあることが分かった。そのため、反応による不安軽減は、下位群よりも上位群に効果的であったものと考えられる。

因子 4「意思疎通不安」は交互作用が有意であった ($p=0.015$)。各群の意思疎通不安の平均値を見てみると、無反応下位群 ($M=3.693$)、無反応上位群 ($M=3.716$)、反応下位群 ($M=3.688$)、反応上位群 ($M=2.893$) であり、この結果から、反応を行うと上位群の不安の度合いをより大きく軽減できることが明らかとなった。これは、面接者の反応があることによって、被面接者が自身の言ったことが相手に伝わっていると安心できたためであると予想される。自由記述から理由を探ってみると、D さん (3.5 点/5 点) は、「相手の自分の思ってることをうまく伝わっているか、不安だった。」と回答していた。無反応群では、被面接者は面接者が全く反応をしなかったために、言いたいことが伝わっているかどうか分からず、不安に思ったものと考えられる。次に、反応群の自由記述を見ると、上位群の F さん (1.5 点/5 点) は、「必ず相槌や私の答えにコメントをしてくださったので、理解していただけてる感じがして不安は感じませんでした。」と回答していた。ここから、面接者が反応をすることで、被面接者に話を理解していると効果的に伝えることができることが明らかとなった。また、同群の G さん (1 点/5 点) は、「仮定法で答える場面で答え方が分からなくなり、少し不安になった。」と回答していた。非常に具体的な場면을挙げてくれたこと、それから不安得点が非常に低いことから推測するに、上記の場面以外ではほとんど不安を感じていなかったものと予想される。こうした結果から、筆者らは下位群よりも上位群の不安の度合いを効果的に軽減できたと考えている。

7. 3 RQ3 の考察

(3) RQ3. 面接者 (聞き手) の反応の仕方によって、被面接者 (話し手) の不安の感じ方に違いはあるのか？

面接者が相手の発言を繰り返す反応と話し手の各因子の不安得点の相関係数は、因子 1 (特定場面言語不安)、因子 2 (発話不安)、因子 3 (回避願望)、因子 4 (意思疎通不安) の順に -0.013 , 0.160 , -0.113 , 0.191 で、ほとんど相

関関係は見られなかった。一方、共感的反応と話し手の各因子の不安得点の相関係数は、 -0.363 , 0.227 , -0.226 , -0.242 でそれぞれ弱い相関関係が見られた。因子 1, 3, 4 に関しては共感をする回数が多ければ多いほど、参加者の不安を軽減できる傾向にあることが分かったが、これは先行研究の中川・鈴木 (2014) でも示された通り、共感的な反応は話し手にとって好意的なフィードバックとなった結果であろう。因子 2 に同様の傾向が見られないのは、英語を話す・聞くという行動そのものに参加者が慣れていないために、不安が高まったものと推測される。面接者の発話を促進する反応と話し手の各因子の不安得点の相関係数に関しては、 -0.097 , 0.038 , -0.282 , -0.204 で、因子 3, 4 との間に弱い相関関係があることが分かった。因子 3 の傾向については、面接者が話し手に対して、さらに話すように促進しているために、英語を話そうと意欲的になり、不安が軽減したのだと考えられる。因子 4 に関しては、面接者が被面接者の発話に頷き、あいづちを打ちながら聞くという動作を彼らが見て、不安が減少したものと思われる。最後に、話し手の声を出して笑う反応と各因子の不安得点の相関係数については、 -0.125 , -0.156 , -0.280 , -0.396 と因子 3, 4 の間に弱い相関関係が認められた。今回の分析の中で唯一、4 因子全てにおいて面接者の笑う反応の回数が増えれば増えるほど、話し手の不安を減少する傾向があるという結果が出た。ここから会話において、聞き手が笑うことは、話し手の不安感を軽減するために重要であることが明らかとなった。聞き手が笑うことによって、聞き手の同意、理解、共感、承認などの意図が話し手に伝わることの効果が示唆される。

7. 4 RQ4 の考察

(4) RQ4. 聞き手の反応行動の有無で、話し手の発話量に違いがあるのか？

反応の有無によって話し手の発話量に有意な違いは見られなかった ($p=0.17$)。これは、無反応群は同様の意味の発言を度々繰り返す傾向にあったためだと筆者らは考えている。被面接者が不完全な英文や表現を使用したとしても、面接者が反応をすることで、彼らは意思疎通の問題はないと判断するであろう。そのため、反応群において被面接者が誤りを訂正する場面はほとんど見られなかった。一方で、無反応群は、面接者からの反応がなく、意思疎通が

できているのかどうか判断できないためか、自身で文法や表現の誤りに気付いた場合は、発言を始めから言い直す傾向が見られた。例えば、Hさんに高校時の部活動について質問した際、「Uh, uh, I, I didn't belong, belong じゃないな any, any club. Uh, uh I I can't? uh I can't belong any club.」と回答した。本研究では、被面接者の発した言葉を全て1語として数え、総発話語数を調べた。このような言い直しが無反応群の発話量の増加に大きな影響を与えているとも考えられるため、この部分を1回目以外はカウントせずに発話語数を比較すると、有意差があったのかもしれないと考えている。ただし本研究では、反応群と無反応群が話した総時間数について統制をしていないため、上記の分析には課題が残ることも記しておきたい。

7. 5 RQ5の考察

(5) RQ5. 話し手の反応の仕方と、不安の感じ方に関係はあるのか？

反応群と無反応群の順に分析結果を報告する。まず反応群では、参加者が声を出して笑う反応と話し手の各因子の不安得点の相関係数に関しては、因子1（特定場面言語不安）、因子2（発話不安）、因子3（回避願望）、因子4（意思疎通不安）の順に、0.032, -0.112, -0.023, -0.161であった。どの因子においてもほとんど相関関係が見られないことから、被面接者が笑っているかどうかに関しては彼らの不安感にあまり関係がないことが明らかとなった。続いて、3秒以上沈黙する反応と話し手の各因子の不安得点の相関係数については、0.275, 0.069, 0.493, 0.321であり、因子1, 4の間に弱い相関関係、因子3との間には中程度の相関関係が見られた。ここから、会話中に生まれる沈黙が被面接者の不安感を高めることが分かる。特に、沈黙が生まれると話し手は英語を話したくなくなってしまう傾向にあるため、できるだけ沈黙が生まれないように聞き手側（面接者）も多く反応を行ったり、話し手（被面接者）の焦りを抑えるような声掛けを行ったりすることが重要となるだろう。最後に、総発話語数と話し手の各因子の不安得点の相関係数は、-0.206, 0.012, -0.375, -0.433であり、因子1, 3, 4との間に弱い相関関係が見られ、因子4との間に中程度の相関関係が見られた。ここから、不安感が低ければ低いほど、発話語数が多くなる傾向があることが明らかとなった。これは、話し手が流暢であ

れば、英語を話すことにも抵抗は少ないと考えられるため、このような結果になったのだと筆者らは考えている。

無反応群では、参加者が声を出して笑う反応と話し手の各因子の不安得点の相関係数に関しては、因子 1 (特定場面言語不安), 因子 2 (発話不安), 因子 3 (回避願望), 因子 4 (意思疎通不安) の順に, -0.238 , -0.03 , 0.155 , -0.04 であった。ここから、面接者からの反応がなくとも、被面接が笑うことにより発話に対する不安感をわずかだが軽減できる可能性を示唆している。3 秒以上沈黙する反応と話し手の各因子の不安得点の相関係数については, 0.079 , 0.183 , 0.316 , 0.109 であり, 因子 3 との間に弱い相関が見られた。これは反応群同様、沈黙によって、英語を話したくないと話し手が感じるためであろう。最後に、総発話語数と話し手の各因子の不安得点の相関係数は, -0.285 , 0.229 , -0.118 , 0.083 であり, 因子 1, 2 との間に弱い相関関係が見られた。こちらも反応群と同様に、流暢な話し手は不安を感じにくいと考えられるため、因子 1 の不安は減少傾向があったのであろう。因子 2 に関しては、英語を話すという経験の少なさから、不安感が高まったものと思われる。

8. 結論

8. 1 要約

RQ1 の聞き手の反応の有無による発話者の不安度の差異について、特に因子 4 「意思疎通不安」では有意差が認められたため、聞き手の反応がなければ不安が高まる傾向にあることが明らかとなった。

RQ2 の発話者の英語力の差で、彼らの不安度に違いがあるのかに関して、因子 3 「回避願望」、因子 4 「意思疎通不安」において、有意差が認められた。どちらの因子も上位群の不安の度合いが有意に低いことが明らかとなった。

RQ3 の面接者（聞き手）の反応の仕方によって、被面接者（話し手）の不安の度合いに違いはあるのかについては、共感的反応と全因子の不安度との間に、弱い相関関係が見られた。因子 1 「特定場面言語不安」、因子 3 「回避願望」、因子 4 「意思疎通不安」においては、共感回数が多ければ多いほど、被面接者の不安を軽減できる傾向が分かったが、因子 2 「発話不安」は高まる傾向にあることが明らかとなった。発話を促進する反応と因子 3 「回避願望」、

因子4「意思疎通不安」との間には弱い相関関係があることが明らかとなり、発話促進反応が多ければ多いほど、話し手の不安は低くなる傾向にあることが分かった。声を出して笑う反応と因子3「回避願望」、因子4「意思疎通不安」の不安度の上に弱い相関関係が認められ、笑う反応の回数が増えるほど、話し手の不安を減少する傾向があるという結果であった。

RQ5の被面接者（話し手）の反応の仕方と、彼らの不安度との関係性については、沈黙と、因子1「特定場面言語不安」、因子3「回避願望」、因子4「意思疎通不安」の間に、弱～中程度の相関が認められ、沈黙の回数が増えると、話し手の不安感も高まる傾向が見られた。総発話語数と因子1「特定場面言語不安」、因子3「回避願望」、因子4「意思疎通不安」の話し手の不安度の間にも弱から中程度の相関が見られ、発話語数が多くなると、話し手の不安感も低くなる傾向が見られた。続いて、無反応群は、参加者が声を出して笑う反応と因子1「特定場面言語不安」の間に弱い相関関係が見られ、会話中の特定場面において話し手の不安軽減ができる可能性を示唆していた。沈黙反応と因子3「回避願望」の話し手の不安度の上に弱い相関が見られ、沈黙反応が多くなると、話し手の不安もやや高まることが分かった。総発話語数と因子1「特定場面言語不安」、因子2「発話不安」との間に弱い相関関係が見られた。発話語数が多ければ多いほど、因子1「特定場面言語不安」の不安感も減少する傾向にあったが、因子2「発話不安」は高まる傾向にあることが明らかとなった。

8. 2 教育的示唆

本研究の結果、発話者の英語力が高ければ、回避願望は低くなることが分かった。さらに、聞き手の反応行動により、話し手の意思疎通に対する不安を軽減できること、特に、高い英語力を有する学習者にとっては、その効果が高いことが明らかとなった。回避願望については、反応行動に関係なく、英語力が高ければ高いほど、英語での会話を避けようとしないう傾向にあるということを示唆している。しかし、裏を返せば、英語力が低いと英語を話したくないという不安が高くなることを示している。そのため、スピーキング活動を行う際には、学習者が何を英語で話すのかを理解できるような明確な指示を出したり、活動を行う前にその不安を低減するために練習時間を確保したりすることが重要であると言えるだろう。

次に、意思疎通不安に関しては、反応行動が学習者の不安度を減少させる効果は、高い英語力の学習者に対して特に有効であるものの、英語を話すことが苦手な学習者（話し手）に対しても効果的である。その理由を筆者らは、聞き手である他の学習者や教師が反応をすることにより、話し手である学習者は、自身の話した英語は伝わっているという実感から、その不安度は低くなるのだろうと考えている。この結果から、話し手の発言に対して、聞き手が反応をすることが、話し手の不安を軽減するという点で重要であると言える。そのため、英語による反応行動について教師が学習者に学ばせること、また、学習したことを実践する場面を設けるために、話し手となる学習者が英語で発言をした後に、他の学習者はそれに対して、反応をするように指導することは、教育的に価値があると筆者らは考えている。しかし、やみくもに反応の仕方を英語で教授するのではなく、まずは簡単かつ数個のみ学ばせるのが良いであろう。例えば、「I see」「yeah」「you're right」などが考えられる。今後はリスニングの指導においても、話し手との対話を協働的に高めるという視点から、聞き手の反応行動や態度を指導する必要があるであろう（Rost, 1990, 萬谷, 1995）。

面接者（聞き手）の反応行動と被面接者（話し手）の不安度の相関関係を調査した結果、話し手（学習者）が英語を話す場面では、聞き手（教師）は共感する、発話を促進する、笑うなどの反応をすることで、学習者の不安を軽減することが示唆された。不安が軽減されると、学習者の発話動機も高まるものと思われる。スピーキングの指導では、学習者に話させることだけが意識されるが、聞き手の反応が、話し手の情意面に影響するということの重要性をより認識する必要がある。また、教師と学習者との会話および学習者同士の会話において、聞き手として具体的にどのような反応行動ができるか、どのような反応行動が不安を軽減するかについても本研究から示唆を得ることができる。以上のような聞き手を重視した指導によって、より活発で不安の少ない言語活動を促進することができると思われる。

被面接者（話し手）の反応行動と不安度の相関関係を調査した結果、不安の感じ方が話し手の各種の発話行動と関連することがわかった。両群において、話し手の沈黙反応と不安感と共起することが明らかとなり、特に反応群にお

いて特に不安感が高まることが分かった。会話中に沈黙が生まれてしまうと、学習者は英語を話したくない、聞き手が自身の話を理解できているのか分からないという感情から不安になるのではないかと筆者らは考えている。そのため、聞き手である他の学習者や教師は、できるだけ積極的に話し手の発言に対して反応をするように心がける必要があると考えている。

次に、総発話語数と不安度の関係から、反応群において発話語数が多ければ多いほど、話し手の不安感は低くなる傾向が見られた。この結果から、聞き手となる学習者や教師は話し手に対して発話を促すような反応をすることは、話し手の不安度を軽減する効果がある可能性を示唆している。一方で、無反応群は、会話中の特定場面における話し手の不安については減少傾向にあったが、発話に対する全体的な不安は高くなる傾向にあることも明らかとなっている。これは、聞き手からの反応がないために、会話に沈黙が生まれ、話し手が焦って口数が増えていることが原因であると筆者らは考えている。これらの結果を基に、スピーキング活動を行う際には、双方が反応できる環境を整えてから実施するとよりよい効果を期待できると筆者らは推測している。

8. 3 改善点

本研究には大まかに3つの改善点があると考えている。1つは参加者の英語力による群の分類の仕方についてである。今回は参加者の直近の TOEIC (L&R) を英語力の指標として使用した。本研究では Listening と Reading の力を使用した。Speaking の力を指標とすべきであった。2つ目は、本研究では、磯田 (2008) と元田 (2000) を基にしたアンケートを使用した。特に後者は、第二言語として日本語を学習する人たちの不安感を測るために作られたものであったため、本研究により適したアンケートを作成する必要があるかもしれない。3つ目は、面接者の反応行動の一貫性に関することである。面接者は1人であったため、反応の仕方に大きな差はなかったが、完全に一貫した反応行動を取ることが難しい場面もあった。今後は、一貫した反応行動を取るためのループリックの設定も必要かもしれない。

8. 4 今後の研究課題

本研究では、英語のスピーキング場面における、面接者と被面接者の対話を対象としているが、今後、学習者同士で英語による会話を行い、聞き手となる

学習者が話し手に対して反応をする、或いはしない時に、話し手の不安の感じ方に違いはあるのかどうかを調査すると興味深いであろう。

続いて、研究対象の年齢を低くして本研究同様の調査を行うと新しい発見があるかもしれない。今回の研究では大学生が調査対象であったが、もしそれが小学生や中高生の場合、不安の度合いが増加するのか、または低下するのか調べることによって、年齢ごとにスピーキング活動をどのように行うべきかを考える際のヒントにすることができる。発達段階によって、どのような聞き手の態度の指導をするとスピーキング活動の不安が下がるのかを調べることができるだろう。

引用文献

- Crookall, D., & Oxford, R. (1991). Dealing with anxiety: Some practical activities for language learners and teacher trainees. In E. K. Horwitz & D. J. Young (Eds.), *Language anxiety: From theory and research to classroom implications*, (pp. 141-150). Prentice-Hall.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety, *The Modern Language Journal*, 70(2), 125-132.
- Macintyre, P. D., & Gardner, R. C. (1991). Methods and results in the study of anxiety and language learning: A review of the literature, *Language Learning*, 41, 85-117.
- Macintyre, P. D. (1999). Language anxiety: A review of the research for language teachers. In D. J. Young (Ed.), *Affect in foreign language and second language learning. A practical guide to creating a low-anxiety classroom atmosphere*, (pp. 24-45). McGraw-Hill.
- Matsuda, S., & Goble, P. (2004). Anxiety and predictors of performance in the foreign language classroom, *System*, 32, 21-36.
- Mejías, H. (2014). A case study of anxiety in the Spanish classroom in Australia, *Journal of University Teaching & Learning Practice*, 11(3), 1-13.
- Rost, M. (1990). *Listening in language learning*. Longman.
- Young, J. D. (1990). An investigation of students' perspectives on anxiety and speaking. *Foreign Language Annals*, 23(6), 539-553.
- 飯村文香. (2016). 「日本人学習者のプレゼンテーションと不安; プレゼンテーションコンテストの効果検証」. 『関東甲信越英語教育学会誌』, 30, 71-84.
- 磯田貴道. (2008). 「英語スピーキング抵抗感尺度の作成」. 『広島外国語研究』, 11, 41-49.

- 小林 翔.(2021).「原稿を準備しない方法と準備する方法の異なる指導法の違いがスピーキングの不安軽減に与える効果」.『外国語教育メディア学会関東支部研究紀要』, 5, 17-38.
- 物井尚子・羽根井寛人.(2017).「高学年児童が感じる外国語不安と英語運用能力との関係」.『日本児童英語教育学会研究紀要』, 36, 53-68.
- 元田 静.(2000).「日本語不安尺度の作成とその検討 目標言語使用環境における第二言語不安の測定」.『教育心理学会研究』, 48(4), 422-432.
- 文部科学省.(2017).『中学校学習指導要領』, 文部科学省.
- 中川紗江・鈴木直人.(2014).「対人場面における聞き手の態度が話し手の生理反応に及ぼす影響」.『感情心理学会研究』, 22(Supplement), 25.
- 西谷まり・松田稔樹.(2003).「ベトナム人日本語学習者の外国語不安」『一橋大学留学生センター紀要』, 6, 77-89.
- 松宮永賀子.(2006).「児童が好む活動に関する意識調査; 不安の強さに焦点をあてて」.『日本児童英語教育学会研究紀要』, 25, 89-106.
- 萬谷隆一.(1995).「リスニングにおける日本人学習者の聞き返し行動の研究」.松村幹男先生御退官記念事業会(編).『英語教育学研究』(pp.335-344). 溪水社.